Takashima Toujyu Kai 会報

# 高島藤樹会

No. 20
2019.5.20

（題字は、竹脇曇卿先生によるものです）

発　行
NPO法人　高島藤樹会
〒520-1224
滋賀県高島市安曇川町上小川 225-1
藤樹書院・良知館内
電話・FAX　0740（32）4156

高島藤樹会　副会長
**徳丸　和枝**

昔、ある男に四人の夫人がいました。男は不治の病で伏せり、死を前にして、一番可愛がっていた夫人に一緒に死んでくれないかと頼みます。ところが、こんなに可愛がっていたはずの夫人が「お断りします」とすげない返事です。男は二番目に目をかけていた夫人にも聞くと、また同じ返事です。そこで男は三番目の夫人に声をかけると「お墓までならご一緒します。でもそれ以上は嫌です。」の返事です。男は、ずっと粗末に扱っていた四番目の夫人に声をかけると「いいですよ。死出の旅路ご一緒します。」と答えました。

一番目、二番目の夫人は、財産や地位、そして健康を言うそうです。お墓までなら、と言った三番目の夫人は家族や友人、同僚のこと、四番目の夫人とは、自分の魄・心の喩えであると。これは昔、有線放送の仏教法話で耳に残った話です。

現代の経営哲学者・稲盛和夫氏は「この世は自分の魂を磨くためにある」と、はばかること無く断言されています。

遡ること四百数十年前、中江藤樹先生は「私達は明徳という美しい鏡を持っている」称え、いつも磨いていなさい、でないと曇ってみえなくなってしまうから、と言われます。

私達は自分を基準にして物事を見る事が常のように思います。そして、その基準は自分の都合によってすぐ変化する基準の「私」を持っています。

「人間千々よろずのまよひ、みな私より起れり」（『翁問答』）。「私」は、執着心や欲望やいかりの心、俗にいう三毒（貪瞋痴）と仲良しで、それらがちり、ほこりのように堆積すると、元々の美しい善の心である明徳が曇ってしまうと言うのです。

『藤樹規』には、〝忿を懲らし欲を塞ぎ、善に遷り、過ちを改む〟を日常の規範にしましょうと、門人たちに掲げています。

それは、聖徳太子が〝忿を絶ち瞋を棄てて人の違ふを怒らざれ〟（十七条憲法）と同じです。

心の憤りを絶ち、怒りを現わさぬように、他の人が自分のままに成らぬからと言って腹を立ててはいけない。と太古の昔から我らは先人からの智慧を授かりました。

けれども「吾、日に吾が身を三省す」（『論語』）が続かないのです。

一週間、一か月は続きます。でも百日、千日になると忘れ、自分で理由づけするのです。ああ強靭な心がほしい、とないものねだりもいいとこです。

先生はまた「誠意」―意を誠にす―の「意」を意念と言われ、ものがほしいなどの私の欲と解釈され「誠にす」にはその意念に打ち克ち、意念をとり払わねばならないと、忖度もこの「誠意」を言われました。

あるいはまた「敬しんで五事を用い」（書経）を引用され、日常の立ち振る舞いの中で、貌言視聴思を心に留め、習慣にしていけば明徳の澄んだ鏡に近づく方法もありますよ、と言われます。

それが日々できているのか、少しは曇りがとれているのか、これもまた自分基準の範疇でしかわかりません。

でも、昔の格言にあるではありませんか〝万里の路は即ち一歩の積、万巻の書は即ち一字の積〟と申します。〝大事なさんと欲すれば、すべからく先ず小事を務むべきなり〟と。

毎日の微々たる積み重ねの中で私達は〝臨終定年〟まで先生の教えを咀嚼して、恩送りをしていきたいものです。

孫からTVで覚えたての台詞「ぼーっと生きてんじゃねえよ」を聞かされました。一緒に笑いながらも、中らずと雖も遠からず哉です。生きざまは心次第哉。

## ひじりの声

上田藤市郎

過日、思いがけないことに市内の中学校で一か月余の間、英語の授業をすることになった。最終日に一年生の生徒を前に話をした。既に、生徒が学んだ英語の単語は、「親切な、人に親しみやすい、快活な、穏やかな、礼儀正しい」などであった。これらの人柄を表すことばは、そのような態度を身に着けた人が、英語を話す人の中に実在したからこそ、これらの言葉が今も伝えられているのです。

みなさんは、言葉を学ぶとき、その単語をただ、覚えるのではなく、自分もそのような人柄を備えた人間になろうと努力することが大切です。そういうことを続けていけば、みなさんはきっと、「美しく、賢い人になって、他の人から尊敬される」ようになります。私たちは、お化粧したり着飾ったりして自分を美しく見せようとしますが、それは内面の美しさではありません。他方、人を傷つけるような悪い言葉も存在しますが、これらを避けていくことが大事です。

言葉を学ぶということは、それを使えればいいのではなくて、自分の生活態度に反映させることです。

藤樹先生は、中国の書物を独力で学んで、人間の生き方にかかわる名言を紹介しておられます。しかもそれを自ら実践しようと努力された稀有な方であることがわかります。

# 高島藤樹会の活動

## 「中江藤樹・心のセミナー」を開催しました

「中江藤樹・心のセミナー」は、広く市内外の皆様に藤樹先生をもっと身近に知っていただきたいと願って、フォーラム委員会の企画・運営により、例年この時期に開催してきました。

平成三十年度は、二月十六日（土）の午後に安曇川公民館ふじのきホールにおいて開催し、市内六十名、市外からも十五名の方が来場されました。

当日は、東日本国際大学東洋思想研究所の高橋恭寛先生の『明治百五十年をむかえて、中江藤樹の教えをどう活かす』と題したご講演を拝聴しました。「①江戸中期の藤樹学、②幕末から明治にかけての中江藤樹の教えがどう展開したか、③明治維新百五十年の今、中江藤樹の教えをどう活かすのか」とのサブテーマに沿って、お話しくださいました。

参会者一同、高橋先生の熱弁と饒舌に圧倒されながら、多くのことを学ぶことができました。

## 「立志祭」での『よえもん君クリアーファイル』の贈呈

藤樹先生の誕生日である三月七日の前後に、九歳の頃の藤樹先生の思いを知り、今の自分を見つめ、自分の志を持つための足がかりとするために市内の全小学校の三年生を対象に、「立志祭」が実施されています。

そこで、高島藤樹会では三年前からその「立志祭」において、広報・啓発活動の一環として、「五事を正す」とキャラクター「よえもん君」を印刷したクリアーファイルを三年生全員に贈呈してきました。

今年度は市内九か所（地域合同開催もあり）で実施された「立志祭」に、該当地域の理事、もしくは校長先生から三年生にクリアーファイルを渡していただきました。なお、当日「立志祭」に出向いて、「五事を正す」などについてのお話をする時間をいただけた会場もありました。

お世話いただきました理事の皆様、ありがとうございました。

### 朽木西小学校での立志祭

三年生は一人でしたが、全校児童四人が参加して立志祭が行われました。地村校長先生のお話、頌徳歌（こうとくか）の斉唱、「私の志」発表、藤樹紙芝居、藤樹カルタ会等の内容でした。ファイル贈呈では、「藤樹先生のすごいところ」や「五事を正す」の話を添えました。児童一人一人の明るい表情と真剣なまなざしがとても印象的でした。（広報委員会）

「私の志」の発表

藤樹カルタ会

## 藤樹人間学塾…藤樹思想を学び考え実践する

塾長　田中　清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に藤樹思想を学ぶとともに、今日的意義を自分の頭で考え、仲間と議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月原則第一土曜日の午後、開催しています。本稿ではその模様をお伝えいたします。

一月五日（土）午後、第89回人間学塾を安曇川公民館で開催しました。大津からの初参加者を含めて11名の参加でした。

最初に「人生の壁、偉人はどうした」等の記事の紹介をしました。『中庸』を素読後、『中庸解』の第十章「子路、強を問う」を学びました。孔子の弟子で名高い勇者の子路が聖人の道を目指す中で惑い、孔子に強とは何かを問います。孔子は、強には南方の強（無道な相手をも許す強さ）と北方の強（困難でも筋を立てて実行する強さ）があり、物欲に流されず、物に偏らず、中庸を保ってあらゆる変化に対して二つの強を使い分けることが「至極の強」だと教えます。これを実践した人物は西郷隆盛やガンジーではないかと話しました。

フリートーキングでは、まず二つの強を身に着ける必要がありそれを臨機応変に対応しようとすると中庸等を学んでいる自らの判断力が問われるという意見や日常生活の中で中庸をベースに考える必要があるという意見等が出ました。

二月二日（土）午後、第90回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

冒頭、テニスの大坂なおみ選手の心の整え方の話をした後、『中庸解』の第十一章を学びました。聖人の教えが薄らいだ世になると、中庸を十分理解できず異常な教えを唱える詭弁者のような人物が現れる。しかし君子はそういう教えにはくみしない。徳のある君子（知識人）は、優越感のような惑いがなく、人の目を気にせず、自分で天真の楽を楽しんで、休みなく努めて手を止めることがないので、終に聖人の域にまで到ることができる。中庸は心の平和につながります。

フリートーキングでは、大坂なおみ選手の「調心」が勉強になった、自分も身に着けたいという意見や小学校の子供たちにそれを教えたい等々、大坂選手の話で盛り上がりました。

三月三日（日）午後、第91回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

『中庸解』の第十二章を学びました。中庸の道は、天地万物に広く行き渡っているが目に見えず耳にも聞こえないので知り難い。しかし凡人でも努力すれば知ることができる。天地は大いなる存在であるが、万人を益することはできない。それで人は自分の思い通りにならない時に天を恨むことがある・・・。

そこで曽野綾子さんの対処法を紹介しました。自分の周りに存在するものがすべて善きものと思えば呪わなきゃならないことがなくなるし、辛いことがあっても人生が楽しくなる。幸福に生きるためには、できたら与えること・・・。

塾が終わってから場所を替えて懇親会を行いました。生かされているこのいのちに感謝して、酒を酌み交わし談笑しました。

四月六日（土）午後、第91回人間学塾を安曇川公民館で行いました。

最初に、先日ＴＶで日本人女性（長谷川昌美さん：冒険家の故長谷川恒夫さんの妻）が自費に加えて寄付金を募って、パキスタンの山間地の村に男女共学の学校を建設し、沢山の卒業生が社会で活躍するようになって現地の人たちから大恩人として熱烈に感謝されていると報道されていた話をしました。これこそが利他の模範事例だと思います。

次に『中庸』を素読後、『中庸解』の第十三章を学びました。道は天性に従うもので人々が日常に行うことであるから人に遠いものではない。しかし、人は元来美しい心（良知）を持っているが、長ずるとともに煩悩が生じ汚れて道から離れてしまう。これを解決するには良知を覆う煩悩の汚染を減じていくしかない・・・。

フリートーキングでは、「私たちは煩悩がある中で、利他の心をどれくらい持つことができるか」等について話し合いました。「地域と学校の交流活動をしていると、利他の精神に満ち溢れた人がたくさんおられるこの高島はすごいと思う」という意見や、「本塾のように『修身』の場がこれからの世の中、さらに必要性が出てくると思う」という意見が出ました。

本塾に関心のある方は是非お越しください。心からお待ちしています。

**【藤樹人間学塾　今後の予定】**

五月十二日（日）　◎六月一日（土）
七月六日（土）　八月四日（日）
◎九月一日（日）　十月六日（日）
◆時間　十五時～十七時（原則）
◆場所　安曇川公民館
◎印は塾終了後、別場所で懇親会あり

# 「藤樹紙芝居」の紹介⑬

## 『志を立てる』

**（解説）**

藤樹先生は、数え年十一歳の時、孔子の学説を弟子たちがまとめた『大学』を始めて知りました。先生は、独学で学び「立派な武士である前に、心の立派な成人になることを志した」と伝えられています。

先生は、近江の小川で、ささやかな農業を営む両親の長男として成長しましたが、数え年九歳の時に、武士であった祖父中江吉長の養子となり、両親の元を離れ米子に行きました。この地で始めて文字を習った先生は、すぐに上達し、文字に拙い祖父に代わって手紙を書いたと伝えられています。

その後間もなく、一年余りで、藩主加藤貞泰の移封に伴って、四国の大洲に行きましたが、祖父吉長が、飛び領地、風早の郡宰になったことから、その地に移り住みました。大洲藩六万石の内八千石も占める風早の地を、わずか百五十石の知行であり、すでに七十歳になっていた吉長が任されたのですから、高い信頼を受けた人物であったのだろうと思われます。学問を身につけさせたいという祖父の思いによって、先生はその風早で『大学』に出会うことができたのです。

儒教は、応神天皇（四世紀）の世に、百済から「論語」「千字文」が伝わり、朝廷で用いられてきました。その後は公家の家業となり、鎌倉時代に伝えられた中国宋代の新儒教（朱子学）も主として、禅寺院において禅僧の教養として止まったままで、世に広まるようになったのは、江戸時代になってからでした。

藤樹先生が風早で『大学』に触れ、学んだ経緯について伝えるものはありませんが、大洲城下から離れた風早において、儒教に明るい人物がいたとすれば、禅僧以外になかったと思われます。郡奉行所があったとされる場所近くに、今も「一心庵」という禅寺がありますので、そこで手ほどきを受けたのだろうと思われます。先生の学業は、この風早の地で始まりました。

今日もたくさんの人々が、先生の学徳を慕い、深い感化を受けています。拙い紙芝居ですが、風早の地における先生のひたむきな立志の心が、今の子ども達の大きな夢や希望に繋がることを願って作成しました。

**（紙芝居）**

① 与右衛門さんは、九歳の時、おじいさんに連れられ、近江の小川村から米子に移り住みました。この米子で一年近く暮らした十歳のころ、殿様のお国替え（治める領地が替わること）で、四国の大洲へ行くことになりました。殿様に仕える家来たちは、みんなお城に集まり、家老からくわしい話を聞きました。

**家老**「皆の者、このたびお殿様は、米子から大洲へとお国替えになられた。本日より五日あとに、出立いたす。しっかりと準備するよう申し伝える。皆の者よいな。」

**家来達**「ははあ、分かりました。」

家来たちは、急な命令でしたので驚きました。お城から帰る道々で、小声で話をしました。

**家来一**「たった五日で、引っ越しの準備ができるものでござるか。」

**家来二**「闘いで明け暮れた頃は、命令が出ればその日のうちに出発したものだ。五日もあれば心配はないさ。」

**家来一**「そうだ。そう思えば少し気が楽になった。皆でがんばって準備するぞ。」

**家来二**「我々家来は、お城の大切なものを運び出す準備があるから、家のことは、家族にまかせようと思う。大変だがんばろう。」

② この命令は、与右衛門さんの家にも伝えられました。おじいさんの吉長は、お城の国替えの準備で家に帰れなかったので、おばあさんの指図で、与右衛門さんは、中江家の家来や近所のお手伝いのおじさんと力を合わせ、大急ぎで準備を始めました。

**おばあさん**「与右衛門、家具や台所の道具は、私が片付けますから、あなたたちは持っていく大切な物だけをまとめて、荷造りをしておくれ。」

**与右衛門**「はい、おばあさん、分かりました。何でも言いつけてください。」

準備は思ったより早くできました。

**おばあさん**「おじいさんがお城から帰れないので、助かりましたよ。」

**与右衛門**「おばあさんやおじさんたちが、いろいろと教えてくださったから、何とか準備ができました。ありがとうございました。」

**おじさん**「私たちも、こんなに早くできると思いませんでした。奥様と与右衛門様が、よく働いてくださったおかげです。おなごりおしいですが、どうぞ、お体に気をつけて、長旅をしてくださいね。」

**おばあさん**「お世話になりありがとう。お別れするのがさびしいですが、どうぞお元気でね。」

**おじさん**「だんなさまにも、よろしくお



伝えください。」

**おばあさん**「分かりました。ありがとう。皆さんもおたっしゃでね。」

③ いよいよ、大洲への旅立ちの朝になりました。

**おじいさん**「わしは殿のお供をして、一足先に出立するぞ。お前たちといっしょに行くことはできぬ。四国に行くには、険しい山道を歩き、船にゆられて海を渡らねばならぬ。与右衛門よ、旅の道中、おばあさんを頼むぞ。」

**与右衛門**「はい、わかりました。ご安心ください。おばあさんをしっかりと、お守りいたします。」

**おじいさん**「与右衛門の頼もしい言葉を聞いて安心した。任せたぞ。」

**おばあさん**「おじいさんも、お気をつけて行ってください。」

おじいさんは、与右衛門さんの頭をなで、大急ぎで城に向かいました。

**おばあさん**「大洲までは、気が遠くなるような長旅だけど、与右衛門の足手まといにならないようにがんばって歩きますよ。大切な薬やこうやくは、私が持ちましたから、老人の私も大丈夫ですよ。」

家族の者達は、殿様の一行を見送ってから、米子を出発しました。よちよち歩きの小さい子や、生まれたばかりの赤ちゃんを抱いたお母さんもいます。年老いた人もいますから、ゆっくりと歩かなくてはなりません。与右衛門さんは十歳でしたが、泣き出す小さい子をあやしたり、お年寄りの手を取っていっしょに歩いて、励ましたりしました。

④ 米子を出発してから数日歩くと、いよいよ険しい山道の旅になりました。どの家族も励まし合ってしんぼう強く歩きました。米子を出発してから一か月近くが過ぎた時のことです。長い峠を越え、下りはじめると、目の前に青々とした広い海が現れました。子ども達も大人達も、ほっとして笑顔になりました。

**佐之助**「わあい、海だ。与右衛門ちゃん、あの海は何という海なの？」

**与右衛門**「瀬戸の海だよ。きれいな海だなあ。」

**佐之助**「すると、海の向こうに見える山は大洲かな？」

**お花**「大洲だと思う。お母さんが、『山を越えたら、大洲が見える』と言ってたよ。」

峠の坂を下りて、尾道の港に着きました。今度は待ちに待った船に乗って、四国に向かって瀬戸の海を渡ることになりました。海風は、みんなの体や髪の毛をなでるように、涼しく流れていきました。ようやく、伊予長浜の港（愛媛県）に着きました。

**お花**「与右衛門ちゃん、知っているかな。今夜は、伊予長浜の宿屋さんに泊まるらしいよ。」

**与右衛門**「布団で寝るのは、久しぶりだな。でも、星空を見ながら眠るのも楽しかったね。」

どのような苦労も、過ぎてしまえば楽しい思い出になるものです。その夜は、宇和島の宿屋に泊まりました。久しぶりに、やわらかい布団で、ぐっすりと眠りました。

⑤ 翌朝、大洲城から宿屋まできてくれた出迎えの武士に案内されて、肱川に沿うように造られている山道を登って、大洲に向かいました。大きな山を越えると、先に大洲に着いていたおじいさん達が、家族みんなを迎えてくれました。

**与右衛門**「おじいさん、おばあさんをしっかりとお守りできました。」

**おじいさん**「与右衛門よ、ありがとう。よくがんばってくれたのう。」

そう言って、おじいさんは与右衛門を抱きしめました。

**与右衛門**「おじいさん、あれが大洲の城下町ですか。」

**おじいさん**「おう、そうじゃ。すばらしい眺めだろう。肱川はあゆも泳いでいるぞ。与右衛門、大洲は良い所じゃ。」

**与右衛門**「あゆが泳いでいるのですか。わあ、うれしいな。小川村みたいだ。」

大洲の町は、美しい緑の山々に囲まれた盆地を中心に、米や野菜が豊かに育つ土地でした。盆地の真ん中を、ゆったりと流れる肱川が見えました。

**おばあさん**「与右衛門、ここはとても暮らしやすい所だそうですよ。冬でも暖かい日が多いと聞いています。この大洲で、しっかりと勉強に励みなさいね。」

**与右衛門**「はい、文字を覚え、学問に励みたいです。」

与右衛門さんの言葉を聞いて、おじいさんとおばあさんは、目を細めてうなずきました。

⑥ 与右衛門さんは、大洲に着いて間もなく、近くのお寺で文字の手習いを始めました。ひらがなはすぐに覚え、漢字も覚えて簡単な文が書けるようになりました。

ところが、数か月するとまた引っ越しすることになりました。おじいさんは大洲藩の飛び地（藩から離れた土地）である風早郡を治めるお奉行になったからです。おじいさんは、与右衛門さんを呼びました。風早に着いて間もなくのことです。

**おじいさん**「与右衛門や来なされ。これを見てごらん。」

**おじいさん**「武士にとって、大変役に立つ本じゃ。『庭訓往来（ていきんおうらい）』と『貞永式目』という本だ。これをしっかり学んでおくと武士としてのきまりや生活に役立つことが、よく判るように書いてあるそうだ。まずは、この本が読めるようになると良い。近くにお寺があるので『教えていただきたい』と、頼んでこようと思う。」

**与右衛門**「私のために買ってくださったのですか。ありがとうございます。ぜひ、勉強したいのでお願いします。」

**おじいさん**「これからの武士は、学問をし、いろいろな知識を身につけることが大切だ。わしは、字の読み書きを習わぬまま大人になったので、ずいぶん苦労をしてきた。与右衛門は、これからしっかりと勉強すると良い。まずはこの二冊の本が手始めじゃ。」

**与右衛門**「おじいさん、判りました。しっかり勉強します。」

⑦　おじいさんは、早速近くにあるお寺に与右衛門さんを連れて行き、和尚さんに本の読み方を教えてくれるように頼みました。和尚さんは、快く引き受けてくれました。

**和尚さん**「そなたが与右衛門どのか。何歳じゃ。」

**与右衛門**「はい。私は中江与右衛門と申し、十歳です。」

**和尚さん**「しっかりとあいさつができるのう。明日の朝から始めよう。」

**与右衛門**「はい。ありがとうございます。よろしくお願いします。」

次の日、手紙の書き方がわかる『庭訓往来』と、武士のきまりについて書いてある『貞永式目』を、和尚さんに習いました。家に帰って五、六回読んだら覚えてしまいました。次の日のことです。

**和尚さん**「与右衛門どの、そなたが早くわかり、感心したぞ。実はお奉行から、そなたが立派な武士になるよう、学問を教えてくれと頼まれた。わしは寺の和尚だから、何が立派な武士なのかわからぬ。だが、立派な人間になる道ならばわかる。次は、この『大学』という本を読んでみたらどうじゃな。中国の孔子という学者の教えが書いてある。」

**与右衛門**「どのようなことが書いてあるのですか。」

**和尚さん**「立派な人間になるための教えが書いてある。」

『大学』を手に取った与右衛門さんは、本を開いてみました。難しい漢字ばかりが、びっしりと並んでいたので驚きました。

**与右衛門**「難しい知らない字ばかりですね。早く読めるようになりたいです。」

**和尚さん**「その思いこそが大切なのだ。分からない時は、遠慮せずにたずねに来なされ。」

**与右衛門**「一生懸命勉強したいので、よろしくお願いします。」

⑧　屋敷に戻った与右衛門さんは、わくわくしながら、和尚さんから授かった本を開きました。知っている漢字の意味を考え、分からない難しい漢字の意味を読み取ろうと、くり返し、くり返し考えました。しかし、少し手紙が書けるくらいの力では何ともなりません。与右衛門さんは、夜明けを待って和尚さんの所に尋ねに行きました。

**与右衛門**「和尚さん、まず文字の読み方から教えてください。知っている漢字が少なくて、意味の読み取りができませんでした。」

**和尚さん**「そなたにその本を渡したのは、自分の力がどれほどかを分からせようとしたからだよ。では、素読といって、意味を考えることは後にして、漢字をそのまま読むことから始めるとしよう。」

和尚さんは、『大学』のはじめの文から読んでくれました。

**和尚さん**「『大学の道は、明徳を明らかにするにあり。至善（しいぜん）に止まるにあり。』同じ所を読みなされ。」

与右衛門さんも、和尚さんの後に大きな声で読みました。

**与右衛門**「だいがくのみちは、めいとくをあきらかにするにあり。たみをしたしむにあり。しいぜんにとどまるにあり。」（くり返す）

**和尚さん**「よく言えたのう。言えたら覚えなされ。覚えられたら、家でも読みなされ。すらすら読めるようになるとよいな。」

こうして『大学』の勉強は、読むことから始まりました。

⑨　ある日のことです。

**和尚さん**「さあ、始めよう。そなたは後に続きなされ。『天子より以て庶人に至るまで、壱是に皆身を修むるを以て本となす』」

**与右衛門**「てんしよりもって　しょにんにいたるまで、いっしに　みをおさむるをもって　もととなす」

与右衛門さんは、この文を読んだ時、

心できらっとひらめきを感じました。

**与右衛門**「和尚さん、これはどういう意味ですか。」

**和尚さん**「読み方が分かったら、意味が解りやすくなるものだ。まずは、漢字の意味を考えながら、何回も読んでごらん。次第に意味が解ってくるものだ。自分で考えてみるが良い。自分で考えれば力がつく。しっかりがんばりなされ。」

**与右衛門**「和尚さん、分かりました。家に戻って何度でも、解るまで読んでみます。」

与右衛門さんは、和尚さんの励ましを受けて、自分の力でやってみようという気持になりました。家に帰った与右衛門さんは、さっそく文字の意味を考えながら、くり返し、くり返し声を出して読みました。そのうちに、心に光が差し込むように、書いてある意味が解ってきました。

**与右衛門**「こういう意味ではないだろうか。『人と生まれた者は、だれでも自分の行いを正しくすることが根本である』

そうだ。本当にその通りだ。解った。『自分で考えてみるが良い』と言われた和尚さんに、間違いないかお尋ねしてみよう。」

⑩　翌朝を待てず、与右衛門さんは和尚さんのお寺に行きました。

**与右衛門**「和尚さん、よく解りました。私が読み取ったことが正しいかどうか、聞いていただけませんか。」

**和尚さん**「そなたは、明日が待てなくて、今日の内にきっと来ると思っていた。実は、心待ちにしていたところだ。まずは、部屋に入りなされ。」

**与右衛門**「ありがとうございます。よろしくお願いします。私は、『人として生まれた者は、だれでも自分の行いを正しくすることが根本であり、身分とか、大人とか、子どもとかの区別なく、人間として大切なことである。』と解りました。和尚さん、こういう意味でしょうか。」

**和尚さん**「よく読み取れたな。その通りじゃ。人はだれでも自分の行いを正しくすることが根本だと書いてあるのだ。身分が高いとか低い、また、大人であろうと、そなたのような子どもであろうと、正しく生きることでは、みんな平等なんだよ。」

**与右衛門**「やはりそうでしたか。とても大切なことが解りました。実は私は、立派な身分の武士になるために、学問をしようと思っていました。しかし、その前に、人間として正しい心を持つことが大切なのですね。」

**和尚さん**「その通りだ。そなたは米子から険しい山道を越え、海をわたって大洲に来る旅の途中で、幼い子やお年寄りに優しく力づけたり、手を貸してあげたりしたそうじゃな。その人を愛し、人を救う心をもつことが、本当の正しさなんだよ。」

**与右衛門**「和尚さん、よく解りました。この教えの通り、学問に励んで、心正しく、やさしい人間になります。これからもしっかり学びます。」

**和尚さん**「そうじゃ。学問をする大切さに、よく気づけた。がんばりなされ。」

**与右衛門**「はい、よく分かりました。ありがとうございました。」

⑪　家に戻った与右衛門さんは、もう一度、和尚さんに教えてもらった意味を考えながら大きな声で、何度も読みました。与右衛門「天子より以て庶人に至るまで、壱是に皆身を修むるを以て本と為す」

（何度か、くり返し読む）

**与右衛門**「これは、何と尊く大切な教えだろう。『大学』という大切な教えを書いた本が、昔から伝わっていて、この私がその意味を学ぶことができるのは、何とありがたいことだろう。」

与右衛門さんは、こう思うと、感激のため涙があふれて止まりませんでした。

**与右衛門**「和尚さんは、こういう話も私にされたな。

『聖人、学んで至るべし。そなたは、身をもって、それを世の中に示すのだよ。』私は、一生学問にはげみ、この『大学』の教えのとおり、身をおさめて立派な人になろう。それでこそ、人間に生まれたかいがあるのだ。」

この時、与右衛門さんは、数え年十一歳（満十歳）でした。この志を一生忘れず、自分の勉強に生かして、学問に励みました。

藤樹先生は、大人になってから、自分の立てた志を振り返って、『学問の初め、志を立てるより先はなし』と、言っておられます。何事も、志を立てることから始まるのですね。

（おしまい）

▼脚本・挿絵
高島藤樹会教材委員会
▼制作委員
足立清勝・飯田典子・石黒紀代子
北川暢子・清川貞治・高谷美智子
山本義雄　（五十音順）
▼参考文献
『藤樹先生』（高島市教育委員会発行）
『物語　中江藤樹』（松下亀太郎　著）
『藤樹先生年譜』（藤樹書院発行）
『中江藤樹』（滋賀県安曇川町発行）

# 藤樹記念館通信⑧

## 三十二回記念館小企画展開催中

館長　富永　雄教

現在、記念館では、「熊沢蕃山生誕四〇〇年」～中江藤樹の代表的門人～をテーマに小企画展を開催しています。

中江藤樹の代表的門人である熊沢蕃山は、元和五年（一六一九年）に、京都稲荷（京都市下京区）の野尻和利の長男として生まれ、八歳の時、水戸の母方祖父の熊沢守久の養子となって熊沢の姓を名乗り、十六歳の時に、宮津藩主京極高通の紹介で備前岡山藩主池田光政の小姓役として仕えました。

二十歳の時、岡山藩をやめて、近江・桐原村（近江八幡市）の父方祖母の実家に移り、二十三歳の時に師を求めて京都に出て、その年に近江国小川村（滋賀県高島市）の中江藤樹に教えを受けました。藤樹に師事していたのは約八か月程ですが、藤樹心学の神髄を体認しました。

熊沢蕃山像
（藤樹書院所蔵）

その後、ふたたび備前岡山藩で池田光政に仕えて、それを藩士に教示し、大胆な藩政改革を行いました。

蕃山は名君とうたわれた光政の信任も厚く、藩政に手腕を発揮し、その名声は全国に響きました。特に藩学に藤樹の学を取り入れて、政治のより所としていかしました。藤樹の三子や有力門人を池田光政に推挙するなどその功績は大きいと言えます。

四行書（藤樹書院所蔵）
※藤樹と蕃山の共同作品

右の四行書は、中江藤樹と熊沢蕃山の合作の遺墨であるといわれています。一・三行目は中江藤樹の、二・四行目が熊沢蕃山の手によるとされています。「全ての出来事は出来事そのものとして素直な態度で見るべきであり、自己の勝手な考えで解釈するべきでない」という意味です。

蕃山は、後に陽明学者として名を馳せ、師である藤樹と藤樹の教えが広く知られるようになりました。状況に応じて事を行うという蕃山の考えは、特に治山・治水・飢饉対策などに成果をあげたと言われています。

晩年は、三十九歳の時に和気郡寺口村（備前市蕃山）に隠居し、その後は京都や奈良等住まいを転々と移して、以後約三十年間は講学や著述に専念しました。六十九歳の時、古河城下（茨城県古河市）に移り、幕府の命令によって禁固の身となり、七十三歳で亡くなりました。

熊沢蕃山関連の
史跡等のマップ

主な著書は、「集義和書」、「集義外書」、「大学惑問」、「大学小解」などが挙げられます。この度の小企画展では、岡山市、備前市を中心に、熊沢蕃山が活躍した当時を偲ぶ遺墨や肖像画、写真などを展示しています。

旧閑谷学校　講堂
（岡山県備前市）

## 賛助会員一覧

ご協力ありがとうございます。

○ウェストレイクホテル可以登楼
○株式会社 大山建設
○川島酒造 株式会社
○株式会社 桑原組
○有限会社 宏和商事
○税理士法人 小畑会計事務所
○有限会社 白浜荘
○社会福祉法人 新旭みのり会
○ソエダ 株式会社
○田中マネジメント事務所
○株式会社 TADコーポレーション
○鉄屋商事 株式会社
○寺子屋まなざし童心塾
○株式会社 土井薬局
○とも栄 藤樹街道本店
○中村印刷 株式会社
○株式会社 中村測量設計
○ニッケイ工業 株式会社
○有限会社 馬場塗装
○有限会社 綿庄食品店

### ◆賛助会員加入のお願い

ご協力いただける場合は、お近くの理事、または1面「発行所先」にお知らせください。

### あとがき

「平成」から「令和」に元号が替わりました。騒ぎ立てるようなことではないと思いますが、これまでの自分を振り返り、これからの生き方を静かに想う「一つの節目」にしたいものです。　H・M